

MUSIC IN ANCIENT ISRAEL より

詩 篇 歌 に つ い て

前 川 金 治 訳

1966年エルサレムに滞在中入手した、斯界の権威クルト・ザクスに献呈された、674頁もある Alfred Sendrey の力作より THE BOOK OF PSALMS の抄訳を試みた。

.....

詩篇（ヘブル語の Sefer Tebillim, ギリシヤ語の Psalterion, ラテン語の Psalterium）は五つの巻に分かれた 150 の叙情詩である。ヘブル語の表題は、神を讃美する内的な面を意味し、ギリシヤ語とラテン語の方は、古代イスラエルで伴奏楽器として用いられた絃楽器のサルトリーに合わせて歌われる讃歌としての外的な形式を示している。詩の各篇の始めには使用される楽器や演奏形態が指示されている。

その源は原始的讃歌であったとしても、イスラエル人と神との宗教的結合の強さが神エホバの慈愛を高める讃美を詩人に作らせた。最初は感謝の歌、祈りと後悔の歌等が主な内容であった。これらが後に編さんされた詩篇の基礎となった。次に追加されたのは偉大な国家行事の記録を保持する歴史的な叙情詩である。この種の見本は詩篇第30篇でエルサレム神殿の献堂の歌であり、詩篇第137篇はバビロン幽閉の苦しみを描いたものである。この他に、種々の通俗歌、労働歌、収穫歌、恋歌や結婚歌もあった。通俗な感謝の歌の例は詩篇第65篇の10節より14節、以前は通俗歌であったと考えられるものは詩篇第104篇の13節より16節、第147篇の7節より9節。詩篇第18篇は神がダビデを敵の手より救われた時に神に捧げた讃美である。バビロンの悔罪の歌は内容、形式ともに詩篇の編さんに大きな力を与えたものと考えられる。詩篇の形式に関しては学者間に種々の論争があるが、一般に一致した意見はBC 200年頃に決定したという事である。詩篇注釈者の大部分は詩篇の起源をBC 11世紀か10世紀に置いている。又、一部分はBC 8世紀のヒゼキヤ王の時に加えられたとし、第4巻は多分バビロン幽囚か、すぐ後（BC 6世紀）に、又、残部は続く2、3世紀の間に書かれたと考えている。この順序が古代イスラエルにおける音楽文化の発達と完全に一致している。

バビロンとイスラエルとの間に形式、国語と思考の類似点のあった事は見逃がすことは出来ない。しかし、両者の本質的な相違点はイスラエルの高度な宗教道徳である。

ヘブルの詩に影響を与えたものにエジプトの文化がある。よく知られている例の一つにBC 1370~1358の AMENOPHIS-IV 時代の『太陽賛歌』がある。これが詩篇第104篇に及ぼした影響などがある。このような外来の影響があったとはいえ、詩篇は、全体として、ユダヤ人の純真な創作であるという点に学者の意見は一致している。

詩 篇 の 表 題

詩篇の大多数は表題の中に作者と考へられる人の名を記している。150篇の中、73篇は

MUSIC IN ANCIENT ISRAEL より詩篇歌について

ダビデ、12篇はアサフ、11篇はコラの子供達、2篇はソロモン、残余はモーゼ、ヘマン、エタンの作である。一般に詩篇は「ダビデの詩篇」と呼ばれている。ソロモン王が、彼の詩の才能と聖書の列王紀上の4章32節による彼の3,000の箴言と1,005の歌とを考える時、詩篇中に収録された彼の作品の少ないのは意外である。臆測によると、ソロモン王の治世以後の騒乱のため作品の大部分が失われたものといわれる。

コラの子達とはレビ人の一門である。彼等はヘゼキア王の時からバビロン幽囚までの間(724—444 B C)豊富な文学活動を続けた人達である。アサフもコラと同じようにレビの一門であるが、彼らは数世紀もの間文学活動を続けた。これらの51篇はユダヤ教文学では「親のない詩篇」と呼ばれている。詩篇の表題は、その起源、性格、目的、とくに演奏形式を示す重要なものである。一つは起源や性格を示し、他は、旋律や伴奏楽器を示す。語源学上明白なものもあるが、今日も尚不明確なものもある。詩篇は音楽自身の魂から生れたもので、その音楽的背影の重要さが力説される。演奏形態を示す角度からこの表題語を検討する時、一般に考えられている以上に注釈上役立つこととなる。

一 般 用 語

聖書の正典には詩篇に対する一般的な指示がない。ただ各詩の表題に shir や mizmor のような特別な語が用いられている。ユダヤの礼拝式用の中では詩篇を Sefer Tehillim 「讚美の歌の本」と呼ばれていた。この通俗的な名称がよく詩篇の目的を示している。Tehillah は讚美の歌を意味する hallel 即ち「讚美する、から出来た語であり、ヘブルの宗教ではしばしば使用されている。

各詩は内容と形式において異っているものがあるとしても、すべての詩がもっている共通点は礼拝式用の叙情詩的宗教歌である。詩篇が現在の形態をとる迄には、いろいろな発展の段階を通過してきた。しかし、編さんの最終目的は不変であった。

不思議なことに、tehillah は第145篇の副題として全篇中ただ一度だけしか使用されていない。「讚美の歌」の語は多分その他の詩から省略されたのかも知れない。Moulton の訳には一般にこれらの表題が記されていない。

Tefillah は祈りを表わす語で、第17篇、第90篇、第102篇と第142篇の頭書に見られる。頭書の語が「哀歌」の形式を示す場合もある。第72篇20節の如く感謝の祈りを含む時もある。

Moffat は tefillah を第90篇と第102篇には「祈り」と訳し、第142篇では「祈りの叙情詩」と訳している。

頭書の Mizmor は、語源は Zmr で楽器により伴奏される歌の意で、手拍子やリズム楽器の伴奏で歌われる舞踊の歌とは別に単独で演奏されるものである。よく使用される伴奏楽器は絃楽器の nebel で、ギリシヤ語の psalterion, ラテンの psalterium, 英語の psalterium で、詩篇を psalter と呼ぶのもこの故である。

Mizmor は英語聖書では psalm, Wycliffe 訳では Salm, Moffat 訳では song となっている。

次に副題の shir がある。ギリシヤ語の asma ödē, ラテン語の canticum 又は hymnus で「歌」を意味する。これが詩篇の初期の名称であったと考えられる。喜びの折りに歌われる叙情詩であった。特に、レビ人の聖歌隊によって演奏される歌に与えられた名称であった。

MUSIC IN ANCIENT ISRAEL より詩篇歌について

shir は mizmor と一緒に使用される事が多い。第46篇に又少し変形して第18篇に現われている。このラテン訳は Canticum Psalmi 又は Psalmus cantici で「歌われる歌」である。

Midrash の訳によると mizmor は楽器により伴奏される詩篇で、shir 合唱のグループだけで歌われる。他の処では shir は俗歌を歌うのに用いられる。Zmr の語源はアツリシアで「歌う、又楽器を演奏する」意味である。shir は聖書の中で儀式と一般に宗教の歌に用いられた。

第120篇から第134篇までの15篇に shire ha-ma'alot が副題として現われている。VULGATE と JEROME の訳は共に英語の "Songs of Degrees" である。歴史家ヨセファスは、エルサレム神殿の婦人の庭からイスラエル人の庭まで15段の階段があったと記している。最古のラビの伝説によると、この15の階段は、この15の聖歌に関係があるとしている。

教父達の意見によると、15の聖歌があるように、忠実な者はこの15の階段を通過して讚美しながら神に登ることが出来た。これらに対し、いろいろの説があるがこれは、地理的に高台にある神殿の建てられていたエルサレムへ三大節に上ってくる巡礼の歌であった。

PHILO によると、初なりの果物を捧げる祭はいつも喜びの祭であり、農夫達は広場に集合し、歌いつつ、又パイプを吹きながらシオンへ進んで行った。行列が神殿に着くとレビが詩篇の第30篇を歌った。

THIRTLE の説によると王ヒゼキアの治世におけるアツシリアの侵入、王の重病の癒されたことなどから作られたもの等があるが、信じられる説は、これらが少なくとも8世紀にわたって作られたことである。LUTHER の訳では「この詩篇は高い所か、多数の歌手の群によって歌われる聖歌とある。

更に、GESENIUS や DE WETTE によるとこの語は詩の特別な形式やリズムを示し各節の終りが、次節の最初に持越され次節の出発点となる。

詩篇第32, 第42, 第44, 第45, 第52~55, 第74, 第78, 第88, 第89, 第142篇の13篇の maskil は、七十二人訳の syneseōs 或は eis synsin 「指図に従って」、VALGATE は intellectus, 或は intelligentia, JEROME の eruditio でタルガムは Sekla ṭoba 「よい洞察力」と訳している。この語は多分動詞 sakal 「洞察力を持つ、或は「理解力」の意。GESENIUSは、最初、ミーターを変える「説教風」の詩と考えている。第45篇には maskil の他に「愛の歌」、第142篇には「祈り」、この二つの歌は「説教風の詩」ではない。しかし、語源は sakal が haskil となり「教える、から来たのである。

ROSENMÜLLER はこの語を詩の特別な形式とし、LUTHER は「教訓」、DELITZSCH は「めい想」としている。これら諸説の共通点は、この13篇は熟慮の下、教訓を与える姿勢で各節の芸術的構造を示す韻律に従った形式で書かれたものである。

第45篇の2~5節は詩の作者と歌手とは共に予言者の靈感によって作られ、歌われることを表わす。MOWINCKEL は maskil の意は特別な洞察と理解力をもって、楽器により演奏されるものと説いている。

では、詩篇150篇の中から何故13篇だけが maskil とされているか。結論は、これらの聖歌は第45篇と長文の第78篇以外は悔罪の歌である。

詩篇第16, 第56, 第57, 第58, 第59と第60の6篇の miktan は語源的にはヘブル語の katab 或は katam で「聖書」、「詩」、「格言」の意味である。

MUSIC IN ANCIENT ISRAEL より詩篇歌について

LUTHER の訳は「宝石」である。上記の 6 篇は哀歌の性質を持ち、哀願の種類を示すものとされている。

miktam について HENGSTENBERG は「秘密」とし、ALEXANDER は「霊的な重要性」とし、さらに ROSENMÜLLER などは、書七の誤で語の b が m になったと、イザヤ書 38 章の 9 節を引いて論じている。すなわち「聖書」「詩」「歌」であると。LANGDON は miktam は楽器で、バビロニア語の naktamu よりの転化でタンブリンやシンバルのような打楽器の意と解している。彼の論説の初期の文に shushan はフリユート、miktan は管楽器であると記している。聖書のフランス語訳に力をつくした L. SEGOND はこの語を讃歌と訳している。MOWINCKEL は「贖罪の詩」となし、VULGATE によると「借物の旋律」を意味するという。アツシリアの出土による石板によると、各旋律には、聖歌や俗歌を含むいくつかの讃歌があった事が明らかになった。一般的、miktam は「若者達に教訓を与え教えるために」という意味であると訳され又 Moffat のように「朗唱」とする者もある。

詩篇第 38 と第 70 篇の le-hazkir は記念として、作者が神によって記憶されたい願いを表わしている。Targum は、犠牲を捧げる時に粉と油をそそぐことであるとし旧約聖書レビ記 2 章の 2, 9, 16 節の askara の儀式の一部だと考えられる。72 人訳によると詩篇第 38 篇は毎日歌われるものでなく安息日に歌われるもの、又 Wycliffe は「安息日を記念して」と訳している。

最後に詩篇第 7 篇の副題の shiggayon がある。初期のギリシヤとラテン訳は「誤、過失」と訳し、MIDRASH はダビデ王の「誤」を指している。語源的には「述う」の意で韻律や旋律の異った聖歌であると説く者もある。

詩篇は原則的に一定の韻律によって有節型で歌われた。DE WETTE や ROSENMÜLLER 等は「哀調」の歌、又 HENGSTENBERG は「迷いの歌」としている。HOUBIGANT は数声部を持つ歌であるとしているが、これは音楽の発展に逆行する説である。PARKHURST によるとダビデが敵の手を逃れてさ迷っていた時の歌であるといい、E. DELITZSCH は「よろめき歩く歌」と説明している。

明白なことは、この詩が初めから終わりまで正義の神に信頼し、敵の手よりダビデが救い出された感謝を表わしていることである。語源的に見て GESENIUS は「急速に変化するリズムを伴った野生的な感情」を表わすものとしている。

音楽演奏用語

西洋音楽の記譜法がまだ出来ていなかった時代に記された詩篇のこれらの音楽用語は実に大切な役目を果している。これらの用語は詩篇の研究者に重大な意味をもたらすものであるが第 90 篇から第 150 篇までの間には何も記されていない事は、一巻、二巻、三巻の編さん後第 4 巻が追加されたのであるためか大きな問題を投げかけている。音楽用語の中にも理解に困難なものもあり、72 人訳にも、その意味不明のためヘブル語の発音そのままにしているものもある。又、初代教父達もこの例に倣ったようである。

音楽用語や記号が不明であったので、レビ人達は相当に困惑し、詩篇音楽の助長のため種々案出することを余儀なくされた。又、かれらはレビの歌手と職業音楽家が知らなければならないものを発明したのであった。

神殿音楽の最初にレビ人音楽家の音楽長専用のスコアが存在したはずである。聖歌隊

MUSIC IN ANCIENT ISRAEL より詩篇歌について

長が練習用に使用した合唱譜のようなものがなければならない。しかし、今日の西洋音楽の様式とは別のものであったらう。このスコアには旋律や伴奏楽器が指定され又必要な他の演奏様式のことも指定されている。この用語が記入される場所は聖歌の初めである。これは聖歌の内容に関するものではなく音楽の演奏様式を指すだけである。

ここで重要な詩篇解釈が起ってくる。各聖歌の頭に記されている語についてである。ギリシヤ、ラテン、ヘブルのテキストによると聖歌の詞は章も節もなく、詞と詞の間は休止なく続けられた。

THIRTLE の研究によれば聖歌の頭に書かれているこれらの語は、その後書かれている聖歌だけではなく、その前の聖歌にも適用されるという発見をした。彼は典型的な二つの例として旧約聖書ハバクク書3章とイザヤ書38章10~20節を引用している。

ハバクク書の方は「シギヨノテの調べによる、予言者ハバククの祈り、で始まり「これを琴に合わせ、聖歌隊の指揮者によって歌わせる、で終わっている。

詩篇150篇の中55篇に la-menazzeah 指示が記され、この中52篇は一卷から三巻までに、四巻には全く見当らず、五巻に3度(第109, 第139, 第140篇)現われている。この語は音楽を指導するため選出された歌手、又聖歌隊を指導し得る勝れた音楽知識を身につけた芸術家の意である。そして彼は聖歌の何節かを独唱することも一任されていた。歴代志の記者は、ダビデ音楽組織の最初の歌唱長は Chenaniah であったと記している。

「ケナニヤはレビ人の楽長で、音楽に通じていたので、これを指揮した、

(歴代志上15章22節)

後に、歌唱の指導者として Matthaniah と Jezrahiah が現われている。la-menazzeah は独唱されるか、一部分独唱される聖歌の頭に記されたもので、その他のものは皆な聖歌隊だけで歌われたものである。

古代イスラエルの詩篇唱法と今日の声楽カンタタの間に著しい類似がある。聖歌のあるものは全部独唱者によって歌われるか、又は聖歌隊の交唱によるものである。頭に la-menazzeah のないものは全部聖歌隊によって歌われたものである。本文の中の主格語が「私、になり又「私たち、とあるのは明かに先唱者の独唱と、会衆一同との交唱(聖歌隊を含めて)であった事を示す。

詩篇第5篇は独唱と聖歌隊合唱の二つに分けられた見本である。2から4節に作者は一人称で語り、5から7節の間で三人称となり8と9節で一人称、10と11節は三人称である。そして終りは独唱と合唱である。

詩篇第9篇では16節と17節の間に作者は Higgayon selah と記している。これは音楽休止の意である。20節の終りの Selah は後奏に匹敵する語である。詩篇第13篇と第54篇は独唱用で、第59篇はカンタタとの類似を示している。

nazzah は「輝く、の意であり、いつの世にも、聖音楽であれ俗音楽であれ独唱者或は独奏者は自分の芸術的腕前を最高に鑑賞してほしいという気持には変りはない。詩篇150篇の中から55篇だけに la-menazzeah が記されているのは、これらの詩篇を歌い演奏する巨匠達の希望によるのかも知れない。聖書の Authorizd Version と Harkavy ではこの語を「音楽長に、American Version では「音楽長のために、Jewish Version では「指導者のために、Revised Standard Versionでは「聖歌隊長に、と訳している。

聖歌の頭に記されている今一つの音楽用語に neginah がある。詩篇第4, 第6, 第54, 第55, 第61, 第67, 第76篇に記されている(訳者註=日本語の聖書には訳出されていな

MUSIC IN ANCIENT ISRAEL より詩篇歌について

い。)この語はヘブル語の *naggen* 「絃に触れる」の意で、第71篇22節では「楽器の伴奏で歌う。(聖書訳=立琴をもってほめたたえます)

この語の複数形の *neginot* は絃楽器族を表わすもので、ハープの演奏者は *menaggen* (詩篇第68篇26節) と呼ばれる。*neginah* は「絃楽器の伴奏による歌」となる。後の時代には強音、弱音の印の全般の組織を現わすものとなる。

女性歌手の記されているのは歴代志下35章25節、エズラ記2章65節、ネヘミヤ記7章67節、伝道の書2章8節である。女性歌手が公的に聖なる儀式に属したのか、ただの俗世界の専門歌手であったのか明確でない。しかし、純粋な儀式においては女性の参加は禁じられ、特にエホバ礼拝には音楽の奉仕は男性のみに限られていた。イスラエル人の宗教的習慣によると神殿の儀式に婦人の参加は殆んど不可欠のようである。大祭日毎に諸国から上ってくる巡礼達の世話、祭の後の祝宴の歌と踊り等になくなくてはならない人材であった。詩篇第68篇26節(日本語聖書は25節)に明らかに記されている。*'al 'alamot* は周知の歌の題名、又は、楽器名と訳されている所もあるが、この語は女声の音域を示すものである。ソプラノを意味し、第46篇の頭に「女声コーラスにより歌われる」との指示がある。THIRTLEによるとこの指示は第45篇「愛の歌」のための指示であり、この歌は女声で歌われるのに最も適している。

後年、儀式における女声の参加は禁止され、神殿再建後は男声のみによって歌われた。

セム族の高音、低音は振動数(訳者註=現在の国際高度は 435hz, 演奏高度は 440hz)ではなく、歌声の起伏であった。

当時の伴奏楽器で大きい管と長い絃は高い音、小さい管と短い絃は低い音を出す。ギリシャのキタラの最も長い絃は *hypate* と呼ばれ最高の音を出し、絃の長さが短くなると高さが低くなる。(西洋音楽用語とは正反対)

ヘブルの文法学者も母音 *u* と *o* を高音、*a*、*e* と *i* を低音としている。ヘブル人の考えでは *'alamot* は単に女声のように高い声のことで、実際に高い、低いに余り関係をもたなかったようである。この語の反対が *sheminit* で男声のような性質の声のこと。

結論として *'alamot* は女声、*sheminit* は男声で、通常同一旋律を八度の開きで斉唱されたものである。

'al 'alamot に似た語で *'al ha-sheminit* がある。「8の上に、8絃によって、又英訳は「低音に調絃されたハープ」と訳され、又ハープのオクターブによる勝利の歌と訳されている。多くの注解者はこの語が8絃楽器を意味するとしている。*kinnor*は10絃、*nebel*は12絃の立琴であるが、同じ8絃で形が大きくより低い音を出す楽器があったかも知れない。しかし、EDWALD と OLSHAUSEN は *sheminit* は調の指示であり、GESENIUS と DELITZSCH とは人声のバスを示す語としている。ヘブルの音楽記号が不明のため音程について、西洋音階の7音々階が使用されていたか知る由もないが男声と女声のオクターブ斉唱がなされていたようである。ギリシャ楽器の *magadis* は20絃であったが2本づつ同一音を出すので音階音は10である。ヘブル人はギリシャの音楽要素を極端に嫌っていた。歴代志の記者によると *nebalim* は高音でよく旋律を導き、大形の *kinnorot* は8度低く同一旋律を奏した。THIRTLE はこの語が男声合唱を意味するとしながらも、又第8の日、即ち、民数記29章35節を引用し聖なる集会の日を示すものとしている。

詩篇第53と第88篇の頭に *'al mahalat* とあるが、その意味が不明のため各々の訳者は発音をそのままに残している。THIRTLEによると、これは第52篇と第87篇の後に記され

MUSIC IN ANCIENT ISRAEL より詩篇歌について

た音楽記号の一部で楽長に与えられるものとしている。ヘブル語で、これは「病気」の意で、作者の病中に書かれたものとも考えられる。しかし、ヘブル語の mahol が舞踊の意であるところから JEROME 等は「舞踊のため、或は「繰返しをもつ短い歌の意である」としている。

舞踊の背景音楽としての歌は、旧約聖書出エジプト記15章20節、32章18と19節、サムエル記上18章6と7節等に記され、聖なる舞踊のための歌は数多く見出される。又、この語は動作に関係あるもの或は大声でさけぶことなどと訳されている。MOWINCKEL は「病気に對して、又「病気に勝って」と訳している。RASH 訳の「管楽器による伴奏」は第53篇にも第88篇にも応用され、前者は物悲しく、後者はよろこんで奏するとある。

この語の英訳は SEPTUAGINT や VULGATE にならいヘブル語の発音をとっているが Moffat は「苦しみの曲にあわせて」と書いている。

詩篇第45篇は古代イスラエルの結婚式の歌である。

頭に書かれている語で訳不明のものは

第9篇の 'al mut labben

第22篇の 'al 'ayyelet ha-shahar

第45篇、第69篇、第80篇の 'al shoshannim

第60篇の 'al shushan 'eduit

第56篇の 'al Yonat 'elem rehokim

第57篇、第58篇、第59篇、第75篇の 'al tashhet

で、これ等は詩の最初の言か、当時、流行していた通俗曲の名称であったかも知れない。

詩篇第9篇の 'al mut labben は「子供の死について、他に諸説があり、LUTHER は「美しい青年の」と訳した。この al-mut は第48篇の終にも現われ「不死」「不滅」と訳されている。

英訳には Moulton や Harkavy の「死に到るまで、ユダヤ訳の「永遠に、Moffat の「永久の、等がある。GESENIUS は第9篇の 'al mut は「少女のように、又は「少女の声域に合わせて、といい又他の所で、この語は高音を発する楽器、即ち管楽器の一種であるとしている。THIRTLE は ben は正確には beyn で「選手の死について、でダビデが勝利を記念して歌った語であるとしている。この場合、第8篇に付属するものとして。

結 論

詩篇各篇の頭に示されている用語の解釈はこの2千年間の研究の断面である。以上のように正反対の諸説も散見するが、大切なことはこれらの語が、各詩の制作当時、これを奏する音楽家にどのように理解されたかである。忘れてならないことは、これらの語が音楽家によって音楽家のため書かれた事である。

古代イスラエルの聖音楽の分野で最も必要なものは

1. 聖教隊指揮者が使用した「総譜、
2. 正確な演奏のため次の世代に残す記録である。

この音楽的指示を書き込む最も適当な場所は詩篇の頭か後尾の所である。

(1) Tehillab, 詩篇の礼拝式の名称であるこの語は全篇中1回だけ。

(2) Tefillah は式中の祈りを示す。

(3) mizmor は先唱者か聖歌隊によって歌われる。

MUSIC IN ANCIENT ISRAEL より詩篇歌について

- (4) shier は讃美の歌、聖歌隊だけで。
- (5) shir ha-ma'alot はエルサレムへ上る巡礼者によって歌われる。
- (6) shir yedidot 愛の歌、結婚式用。
- (7) shir hanukkat ha-bayit は神殿の献堂式用。
- (8) maskil は特別の讃美で独唱者と聖歌隊により演奏される。
- (9) miktam 俗曲の中から聖詩用に選ばれたもの。
- (10) Le-lammed は青少年達へ教える歌。
- (11) Le-haskil は犠牲の捧げ物を献げる式用。
- (12) shiggayon は悔罪の歌。
- (13) La-menazzeah
聖歌隊指揮者のため、聖歌隊と共に、又、単独のソロ。全詩篇中55篇にこの語が記されている。
- (14) 'al-neginot と bineginot 絃楽器伴奏の指示。全詩篇中8篇にこの語が記されている。
- (15) 'al ha-gittit 絃楽器のための語で、特に、幕屋の祝典に歌われるものの伴奏。3篇がこれを含む。
- (16) 'al 'alamot は高音の楽器をもって歌を伴奏すること。女声又は少年聖歌隊によって歌われる。1篇がこれを含む。
- (17) 'al ha-sheminit は大形の低音楽器での伴奏、男声聖歌隊用。2篇がこれを含む。
- (18) 'al mahalat は管楽器伴奏で勝利の舞踊のため。2篇がこれを含む。
- (19) 'El ha-nehilot は木管楽器伴奏で約束の地を占領した記念として。1篇がこれを含む。
- (20) 'al mut labben,
'al 'ayyelet ha-shahar
'al shoshannim
'al shushan 'edut
'al yonat 'elem rehokim
'al-tashhet

は詩篇に曲を提供した当時の流行歌の名であって、この中の6が11篇の表題に記されている。

SELAH について

詩篇中のいかなる他の用語以上にこの語は多くの学者の想像をかき立てた。全詩篇の中に71回現われている。第一巻には9篇(3, 4, 7, 9, 20, 21, 24, 32, 39篇)、第二巻には16篇(44, 46, 47, 48, 49, 50, 52, 54, 57, 59, 60, 61, 62, 66, 67, 68篇)、第三巻には11篇(75, 76, 77, 81, 82, 83, 84, 85, 87, 88, 89篇)、第四巻にはなく、第五巻には2篇(140, 143篇)。この中31篇に la-menazzeah がつけ加えられている。

この語の各種の訳の中で72人訳では「歌唱中の休止」、
「楽器の間奏曲」と訳し、HIPPOLYTUS は selah をリズム旋律の変化を示す語としている。Mishnah は別の解釈を下し、当時、詩篇は数個の節に分かれて歌われ、その間にトロンペットの演奏があり

MUSIC IN ANCIENT ISRAEL より詩篇歌について

selah はこの間を表わすものとする。

近代の解釈では JAHN の如きは selah は今日の da capo (曲の初めよりの繰返し) PFEIFFER や ROSENMÜLLER は歌手の休止で、この間楽器のみの演奏があると訳している。GESENIUS や HENGSTENBERG 等は、この語か動詞 shala から来たものとし「静しゆく、歌唱の休止」としている。EWALD と DE WETTE によると、この語は楽器のクレッシェンドを意味する。又、selah は「立ち上る」を意味し、演奏者に「強く、アクセントをつけて」を指図する語としている。HERDER はテンポの変化と他のメロディーへの移行だと訳した。selah は第 3, 第 9, 第 24, 第 26 の 4 篇以外はいつも本文の中にある。72人訳によると第 9 篇と第 10 篇は一つのもので、この意味からは詩の後尾につけられたものではない。儀式中では selah は、しばしば或る詩の最後に置かれ楽器の後奏を意味することもある。楽器による前奏は古代イスラエルにも聖書にも知られていない。

学者達の研究によると selah は各篇の有節形式の表示であるとしている。この語による詩本文の分割は甚だ不規則で推測することは出来ない。時として、この語が劇的な句をもたらしその詩の終りとなることもある。

ユダヤ教法典の伝統によると

「ベン・アルザがシンバルを鳴らすとレビ人は歌い、歌が休止に達するとトランペットが吹かれ人々は平伏する。」

KIMHI 訳は、この語が動詞 salal から来たものとし「引き上げる、新しく始める」と記している。又、絃楽器をやわらかく奏していた楽人達がここでトランペットや打楽器を使用して力強く演奏する。この楽器のみによる強奏の間、声が停止する。

儀式には声楽が重要な部分を占めるが、長時間にわたる演奏には人声も限界に来るので回復のため休止が必要であった。

アッシリア語の zalla からの転化とする人達は、この語を「祈り」と訳するが、ユダヤの厳しい式典の中に準備なしの祈りのそう入は許されない。

STAINER の説によると

「selah は間奏曲で、節の分かれ目で楽器を伴う美しいメロディーにより詩の効果を高める。今日の描写音楽の類である。」

selah に関しての興味ある研究の中で、この語が訳によって全く現われていないものがあるのは、聖歌隊の練習用に使用されたテキストには記入されたが、一般用のテキストには記入されていない。故に、それは誤記でも誤訳でもない。しかし、真意の難訳であることは英訳の聖書のどれを見ても(訳者註=日本語訳も同じ)ただ発音だけが記入されていて意味は不明である。

HIGGAYON について

この語も前述の salah に深い関連をもつ。この語が selah のすぐ後に現われる時は 72人訳と SYMMACHOS の「間奏の歌」、AQUILA と THEODOTION 訳の「永遠の歌」、JEROME の「永久の響」となる。語源的には「ハープの元気よい音」で、音楽的には荘厳な音色をもつ楽器による伴奏である。これとは別に動詞に使用される時は「めい想する」の意もある。

詩篇中に higgayon が salah とともに現われているのは明かに音楽的指示と考えられ

MUSIC IN ANCIENT ISRAEL より詩篇歌について

る。ある学者は Higgayon selah が完全な語形で selah はその省略形であると説き、又、Higgayon も selah も各同じ意味であると説明している。

THOLUCK や HENGSTENBERG は、その語で歌手が、歌を止めて黙想すると記している。

GLASER は反対に selah は詩の節の終りに打楽器の演奏が始まる印としている。この説の資料は旧約聖書中の歴代志上15章16節である（ダビデはまたレビびとの長たちに、その兄弟たちを選んで歌うたう者となし、立琴と琴とシンバルなどの楽器を打ちはやし、喜びの声をあげることを命じた。）

MOWINCKEL によると、それは聖歌隊の歌声が休止し、会衆の「さけび声」が入る所としている。会衆の声は「アーメン」、「ハレルヤ」等であった。

＝ 訳 者 追 記 ＝

今日、西洋音楽で使用されている音符も譜表もない時代の音楽の研究には非常な時間と語学力と忍耐力が要求される。現在の演奏に用いられている強弱記号、速度標語、発想標語や奏法記号のどれに当てはまるのか確定せず実音としての再製に取り組むことは容易ではない。詩篇が書かれ、歌われた土地は東洋の一角である。エルサレムに在る東洋考古学研究所はじめ先輩の研究結果を期待したい。

聖書の地に学び、シリア沙漠を東へペルシヤのペルセポリスまで1万キロのドライブは今も尚、楽しい記憶として甦ってくる。

この偉大な詩篇を書いたヘブライの信仰とその芸術にふれる事は日毎の希望であり、力である。

第23篇 ダビデの歌

主はわたしの牧者であって、
わたしには乏しいことがない。
主はわたしを緑の牧場に伏させ、
いとこのみぎわに伴われる。
主はわたしの魂をいきかえらせ、
み名のためにわたしを正しい道に導かれる。
たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、
わざわいを恐れませんが、
あなたがわたしと共におられるからです。
あなたのむちと、あなたのつえはわたしを慰めます。
あなたはわたしの敵の前で、わたしの前に宴を設け、
わたしのこうべに油をそそがれる。
わたしの杯はあふれます。
わたしの生きているかぎりには
必ず恵みといつくしみとが伴うでしょう。
わたしはとこしえに主の宮に住むでしょう。

MUSIC IN ANCIENT ISRAEL より詩篇歌について

第46篇 聖歌隊の指揮者によって女の声のしらべにあわせてうたわせたコラの子の歌

神はわれらの避け所また力である。

悩める時のいと近き助けである。

このゆえに、たとい地は変り、
山は海の真中に移るとも、われらは恐れない。

たといその水は鳴りとどろき、
あわだつともそのさわぎによって山は震え動くとも、
われらは恐れない。

一つの川がある。
その流れは神の都を喜ばせ、
いと高き者の聖なるすまいを喜ばせる。

神がその中におられるので、都はゆるがない
神は朝はやく、これを助けられる。

もろもろの民は騒ぎたち、もろもろの国は揺れ動く、
神がその声を出されると地は溶ける。

万軍の主はわれらと共におられる。
ヤコブの神はわれらの避け所である。

来て、主のみわざを見よ、
主は驚くべきことを地に行われた。

主は地のはてまで戦をやめさせ、
弓を折り、やりを断ち、戦車を火で焼かれる。

静まって、わたしこそ神であることを知れ。
わたしはもろもろの国民のうちにあがめられ全地にあがめられる。

万軍の主はわれらと共におられる、
ヤコブの神はわれらの避け所である。

PSALMS from MUSIC IN ANCIENT ISRAEL